

共、憚り多く候得ば、申漏し候、普通の事は早く外より被成御聞候乎と奉存候、あなかしこ。

九月念三

貴家様へ此御返事二通代筆の者今日下晡致卒業候得ども猶また桂子並に貰え回翰之代筆申付且爲差登候、双紙類取集の紙包等に拵させ候て飛脚へ差出し候、迄は又五六日も非間入可申存候、然れば此書狀二通飛脚へ差出し候は本月廿八日頃歟十月朔日にも可及候、此義も兼て御心えの上宜敷御推覽可被成下候勿論桂子へ御傳言、煩敷思召候は、此別紙同人御方へ御廻し被成候、ても不苦候、只他見を憚り候事も有之候、へば御兩所共御秘置ん事申もさら也何れまれ御都合宜敷様にと奉存候、以上

○六月の納札會 來六月廿日淺草地高砂俱樂部に於て開催々主大西いせ萬、高橋藤、關岡扇太、山三不二、加山可山、橋田素山の六人會にて課題の「江戸名物詩」に因みて同日午前十時より午後五時迄「江戸趣味品展覽會」を開き好事家珍藏の江戸時代繪畫器物其他の出品を乞ひ縱覽御覧にて明會後午後六時より納札會を用ひ

るやうに成つた新時代の傾向に、徳川期以來の古書畫商を驚倒させ氣死させたまでには、明治の時代も四十の年月を要した。そして古書畫商が傍に展覽會商と云ふ新しい職業が殖えた。自分は之を第一傾向と呼んで置く。次に新時代の傾向は益々進んで數年前から洋畫の様式を以つて日本住宅様式的の半切畫や絹本を書く事が試みられた、數年前上野竹の臺に於て畫報社の催した試みや、今年の春の銀座美術館の展覽會や、巽畫會本部に催された岸田君の個人展覽會などがそれである、之を今第二傾向と名づけて置く。この第二傾向と前後して、主として文展に裝飾畫の要求が著しく現はれて來て、しかも如何なる理由か威壓的大規模の作品のみが頻りに出品された。自分は之を「疑似的裝飾化運動」と稱して將來に起る筈の吾々の生活ともつと密接の關係を保つべき真正の裝飾化運動と區別して置きたいと思ふ。然し兎も角も之を第四傾向と稱へて置く。時代は更らに進轉して昨年の文展や美術院再興展覽會や本年の美術院習作展覽會あたりから、古い錦繪や押繪に固有な版畫の様式を模倣し又は醇化して紙や絹に描く事(自分は之

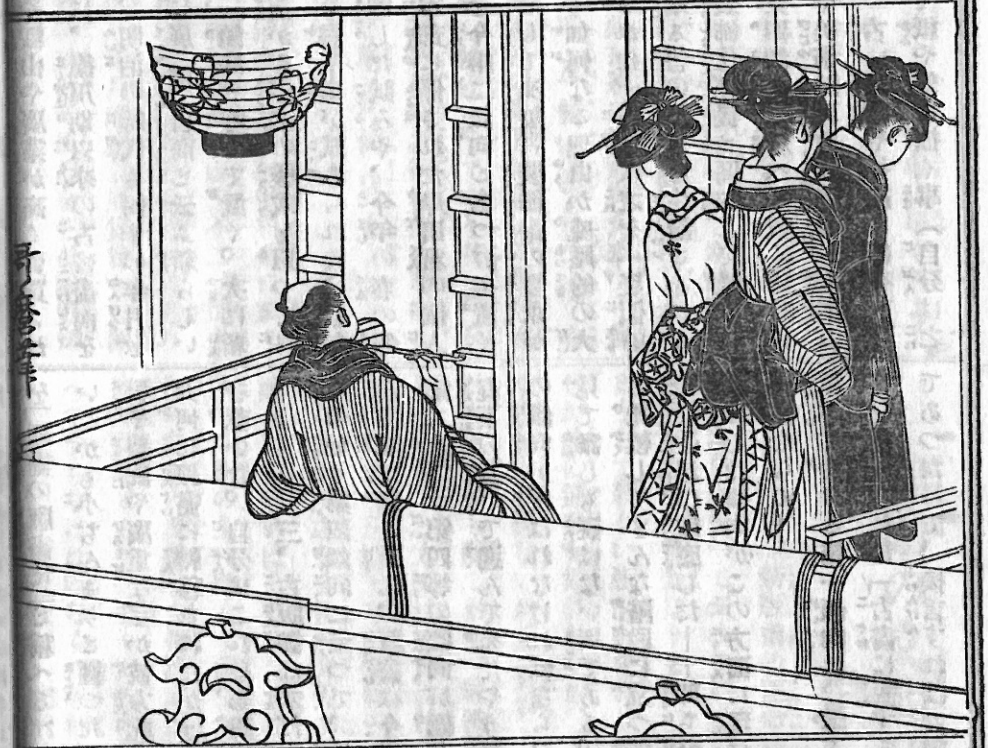
錦繪の文明政策 (一)

文學士 菅原 敦造

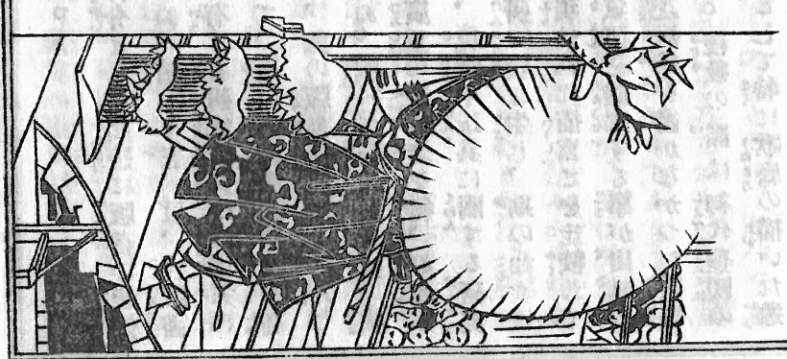
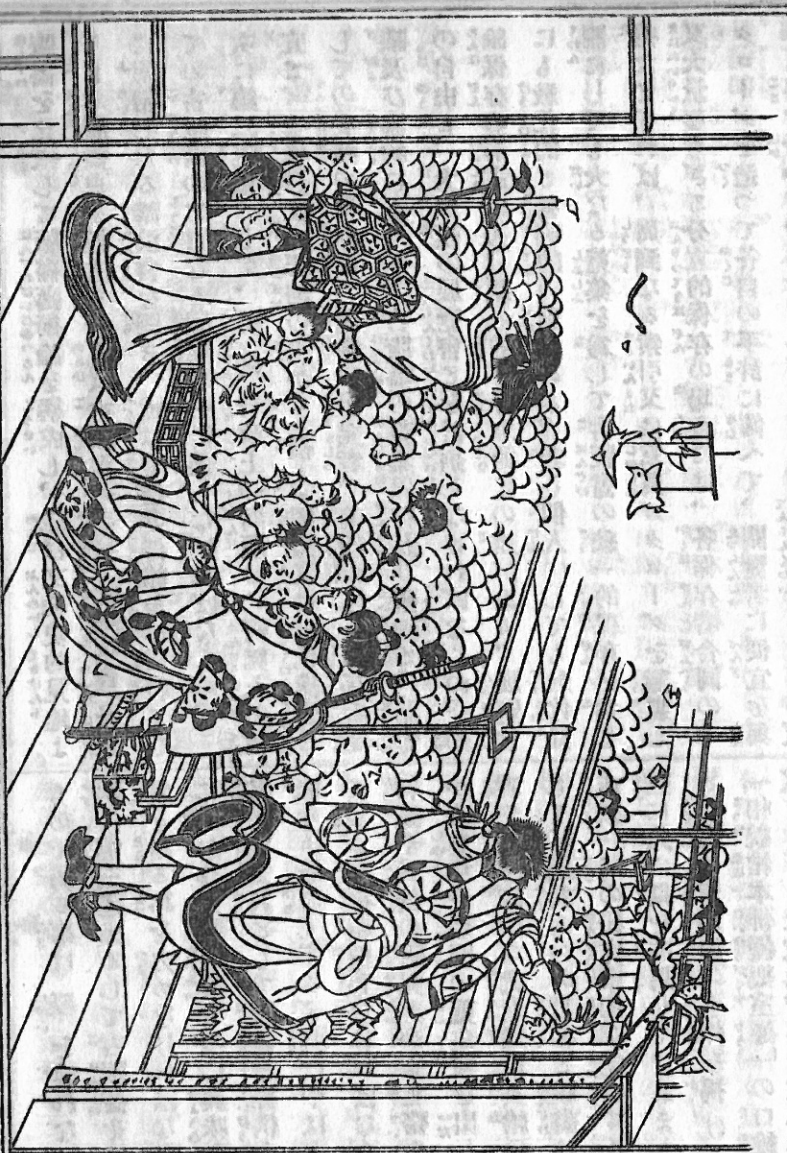
一、新版畫の運命は如何に
「日本の版畫」と云ふあれだけの立派な二百年來の基礎なり潛勢力なり背景なりを有つて居る筈の新時代の畫家が、どうして新しい版畫の製作に經濟上の安心を得るまでに時代が此の運動を助けまいか、又は彼等がさう云ふ風に今の時代を導き得ないか。千麿君も今版畫の新計畫を止め、柏亭君も孤雁君も夢二君も、經濟的に其試みが餘り振はないらしいのに、一方では古い紅繪錦繪の相場が益々騰つて、小形のあまり正確でない錦繪の鰾刻が濫發されるのは何故であらうか。「之を文化の先覺者が拂ふ當然の犠牲」と云つて濟まして居ればそれまでの事であるけれども、然しこれは決して棚の上に乗せて置くべき暢氣な問題ではない。新時代の藝術の愛好者や保護者が眞面目に考へなければならぬ實際問題として、吾々は此の運動に何等かの功程能力を與へてやらなければならぬ事柄であると信する。

を原畫の版畫化と稱へる)が始まつて、一種の輕い音が、いかにも小ぢんまりと纏つた作品が殖えて來た、春信や歌麿や豊國や廣重などが彼方此方に復興して「版畫の様式が如何に原畫に轉移されたか」と云ふ問題が、かなり人の注意を惹いた。自分はこれを第四傾向と名ける。
三、古版畫は未だ時代の新參者
斯の如く第四傾向に至つて、原畫が版畫の領域を侵して進んで來て居る時に、版畫は今何をして居るか。原畫に第一第二、第三、第四等の傾向が繼ぎ々に現はれ、時には急轉直下の勢で進んで來たやうに、版畫にも何等かの革進的の傾向が現はれなければならない事は、時代生活の上から見て誰しも疑はない所である。然らば今版畫はかかる傾向と比較してどんな階段に立つて居るかと云ふに、吾々は時代の生活に徹底した——即ち藝術的價值と經濟的功程との融和した傾向がこの方面に現はれて居ない事を悲しまなければならぬ。
原畫に於ける第一傾向は、云ふまでもなく時代の趣味の變遷を背景とした「古畫に對する新畫の對抗運動」の第一聲であつたので、換言すれば古畫と新畫との間に、鑑賞範圍

の徹底と経済的功程の公認
 とが平衡の状態に達せんと
 したまで、古書が広く深く
 味はひ盡され、之に加ふる
 に新書の趣味が擴がつたと
 云ふ事に起因する。
 然るに版書は、外國の蒐集
 家に依つて從來の経済的功
 程を無視して、少くとも我
 が國の愛好者に取つては不
 當に其價を高められ、更に
 外國の美術論に依つて從來
 の「原畫即本源美術論」の
 停にいや／＼乍ら「版書藝
 術」と云ふ名に權威を持た
 せられた：云はゞ美術界
 の成り上り者である。こ
 の新參者と云ふ階級的の



家や保護者の間に活き／＼
 として残つて居るうちは、
 古版書の趣味の普及も其逸
 品の保存も、恐らくは問題
 になる筈がない。況んや新
 版書の勃興に於てをやであ
 る。
 四、古版書趣味振興
 の三つの運動
 茲に於て第一運動として、
 古版書の存立の爲めに其藝
 術上の價值を表明して過
 去の階級的感情の抑壓を脱
 せしめ、進んで所謂版書趣
 味の普及を計る事を考へな
 ければならぬ。此の爲めに
 は著述・雑誌の發刊・展覽會
 及び講演會の開催、古版書
 の販賣によつて、或は東西の



版書を比較して版畫藝術論を構成し、或は文明史の見地より日本版畫史を編述し、或は古版畫の系統的展覽會及之に附帯したる講演會を開き、或は雜誌の挿繪及び單行としての古版畫の忠實なる翻刻等を計劃しなければならぬ。

次に第二運動として、美術行政上の問題と、研究上の便宜と、交換分配の經濟の上から、個人團體又は教化機關としての美術の保存者、美術の研究者、美術商等の相互の商議及び協約によつて、古版畫の蒐集保存及び整理と、閱覽の自由と、大規模の展覽會を計劃しなければならぬ。勿論保存の形式にも、統一的と分立的との差があり、展覽會にも教化的と營利的の別がある。若し個人にしても教化機關にしても大なる蒐集を爲して古版畫の統一的保存を爲し得たすれば、周到なる索引又は寫真カタログを調製し又大量ならざる分立的保存の場合には、各保存者合同のカタログを造つて各自の手許に備へて、閱覽者に便宜を與へる事を計つてやらなければならぬ。展覽會にしても保存者や研究者の主権にかゝるものは教化的となり、美術商主権のものは營利的となり、兩者の合同的主権に係るものは折衷的となるけれども、概しては保存者や研究者の主権に屬するものである。

動の方式を頭の中考へてばかり居る間は、決して實際の功果は擧つて來ないと云ふ事である、それ故最良の方法は誰でもよい何かを足かりにして、何等かの運動を熱心に持續的に始めて行く事を念としなければならぬ、そして古版畫の發展策が有功に進んで原畫の第一傾向に近い線に達する迄に廣く行渡つて來たならば、其時は即ち新版畫が古版畫に對抗して其存立の基礎を得るやうに成た時である。

「浮世繪版畫逸品集」について

巻尾の豫告の通り、今度好古堂で發賣する「浮世繪版畫逸品集」の第一回は、東洲齋寫樂の雲母摺似顔繪であるが、この繪に現はれたる狂言は寛政七乙卯年秋都座(中村座控繪)で「遊君操吉原養育」と名題を据えて傾城高尾(菊之丞)頼兼(宗十郎)で、何れも大出來と云ふ當り狂言である、瀬川菊之丞は三代目で彼の仙女路考と云ふのがこの優である、澤村宗十郎も三世で俳號を訥子と云つた、その名優揃を寫樂が靈妙な筆でもつて描いて、獨特の雲母摺にしたのだから、浮世繪愛好者は勿論、好劇家も演劇史の參考として、是非一枚は備えて置いて宜いとおもふ。

ものである事は疑を容れない。

次に第三運動として古版畫を仲介として間接に版畫の後援者を護る事を力めなければならぬ。精しく言へば、古版畫に描かれた材題其ものに興味を有する研究者又は好事家に其研究資料として版畫を提供して、更に其研究範圍なり趣味なりを廣くすると共にやはり、此の版畫運動の中に入つて貰ふ事を希望しなければならぬ。例へて云ふならば、旅行家や風景の研究者から北齋や廣重の愛好者を得、好劇家から春章や豊國の蒐集家を出し、兒童や玩具に關する研究者や好事家から武者繪玩具繪の研究者を生じ、斯の如くして材題其ものの實相と版畫に現はれた描寫とを比較して或統一的の研究事節を完成する氣運を醸成する事が出来る。茲に此の期を利用して、あまり芝居繪を畫かなかつた歌麿と北齋の芝居繪の名作を掲げる。棧敷の圖は初代豊國の「相貌繪本俳優樂室通」の口繪として特に歌麿の描いた逸品であり、背面(恐らくは羅漢畫)から舞臺と見物席とを見た圖は、北齋が其「東都勝景一覽」に描いた珍品である。扱て當面の緊急問題として考へなければならぬのは「古

北齋と廣重の肉筆二大作
濱の人

浮世繪師は、一體繪本や錦繪の板下を主として、描いてゐるから、肉筆物も、掛幅ぐらゐなものはあるが、凡べてが小規模である、必竟版畫に重きを置いてゐるから、筆力墨勢を見せる大作物は、おのづと閑却されたのであらう、只だ例外は、江戸市中祭日の大幅の掛行燈とか、又は神社佛閣の大幟とかいふ類に、揮毫した肉筆物に、往々大作物があつた筈であるが、之れも今日、殘存してゐるのは、極めて少ない。

其の中でも、大作を揮毫してゐるのは、恐らく葛飾北齋であらう、文化十四年丁丑十月五日、名古屋西掛所(西本願寺の別院)で、描いた半身の大達摩は、疊百二十疊敷の大きさで、目が六尺、頬が九尺、口が七尺、耳が一丈二尺、面が三丈二尺、筆は俵をほぐした莖や、棕櫚箒や、竹箒を使用したとある、これは有名な話柄になつてゐるが、扱この肉筆圖が、現存してゐるかといふに、「葛飾北齋傳」の著者、故飯島盧心氏が、明治二十五年、彼地へ出かけて、搜索し

に一點ありて、或は興字の略體興字の誤りには非ずや、南無阿彌陀佛の陀字を陀に作り、彌字の弓を方に作るものあるを混じたりと見え、二所とも明白に阿彌施に作れるを思へば、或は然るべくと考へらるゝなり、濫谷氏如何にして此陰文を逸しけむ、とても後彫とも見えぬものを、さてもいぶかし、又師宣の歿年は、繪類考京傳の再考に「元祿八年板本師宣の遺墨委繪百人一首の序跋を以て考ふれば元祿七年なり」とあり、試に近時翻刻の同書を見るに、其解題に黒川眞道氏も然記されたり、即序文には「養川が古人となりしかたみなれば」とありて跋文には、

上略 爰に養川師宣は自然と書圖に奇を顯して世に鳴事を得たる歟此道すける人の爲に古今の風俗時々に移變姿を百繪に残して續子師房家に傳へりしかるに予多年をちなみ月久しく乞求梓に鏤弘めて世上のめをよろこばしむるのみ、

元祿八曆乙亥四月吉辰

大傳馬町貳丁目 木下甚右衛門板

とあり、さては師宣は、此繪の出来し七年五月より八年四月の間に、此繪の出来し七年五月より八年四月の間に、筆持つ諸先生、解熱でも飲ましやつて、もと此方も願み玉へと云爾。

社告

本號卷頭に小島烏水氏の「廣重の傑作東海道五十三次」を掲載すべく前號に於て豫告せしが、同氏は今回俄に渡米せらるゝに付き、そが準備の爲め本號締切迄間に合はず、次號に於て掲載するの止むなきに至れり。

尙同氏は遠く海外より、本紙の爲め助力し、泰西の浮世繪觀及び斯界の研究に付毎號寄稿せらるゝ事を快諾せり、いかに今後に於ける本紙が、異彩を放ちて讀者にまみえんかを、俟ち玉ふべし。

らかに正徳四年午八月二十七日にて歿し、寺は日宗にて谷中と聞けりとなり、關根氏何によりて記されしか、これも訝し、京傳の記す所に據れば、元來養川家の檀那寺は、元名村禪宗龜福山存林寺にて、累代の卵塔はこの別願院にありつるを、數度の水災に失せたるよし、存林寺は旅程の都合にて尋ねざりしが、この別願院は浄土宗にて、梵鐘を寄進すと云ふは、よくよく深き縁なる可く、且師宣の妹門徒寺へ片付たる由、其地にての傳説もあれば、師宣江戸え來りて日蓮宗に改宗せしといふは、一代法華など云ふ事はあるならんが、受取にくき話なり、若くは此院青山善光寺末の尼寺なれば、善光寺などには非ざるか、この寺谷中の善光寺阪よりこゝに移れる由、享保六年粉川丹後守の鑄たる鐘の銘に

中興光蓮社心譽智善上人明 觀大和尚寶永二年臘月初六 請而大樹綱吉公嚴命開創此地

と見ゆれば、至し元祿に死せりとせば、谷中といふも由あるべく、此鐘の周圍に透間も無く施主の名を彫りあれば、是れはもとよりこの鐘に師房永などの名を見出さば御手柄

文學士菅原教造

五、新版畫の開拓と四つの傾向

若し新版畫の中に挿繪をも含めて考へて見れば、原畫の第一傾向に應じた試みは、小説雜誌の口繪や新聞などの挿繪として明治の初年から定期刊行物に現はれた。かなり纏つた作品としては徳川期の歌川派の派れを汲んでしかも、新しい傾向に進まうとした芳年、年方、年英、年峰等の保守的の描寫が先づ時代の注意を惹き、次で之を一步進めて時代生活の描寫にかなりの熟練を示した廣業、永洗、半古、桂舟等の新版畫は、明治二十年代から盛に成つた、之を見分は新版畫の第一傾向と呼んで置く、新版畫の第一傾向と異なる所は、新版畫は書畫商の仲介や直接の依頼に由て取扱はれて、作品は古畫と共に或は代るゝ床の間に於て鑑賞に供せられたのに、新版畫は古版畫の代用し得ざる時代生活の實相を描く使命を帯びて居たのみならず、商工業上の經營と云ふ時代の經濟生活と密接なる關係を結んで居たから版畫藝術上の要求と共に雑誌や新聞の經營者の營利的要

求をも受け容れた。換言すれば決して古書に對する新原畫ほどの名作が出なかつたにも拘らず、出版物の激増と共に新聞界、出版界からかなり大なる引立を蒙つた。

右の第一傾向と全く別途に立つて、全然洋畫の様式を以て版畫を作る運動は、精確に言へば明治と前後して我が國の版畫界に出生した。例へば明治初年前後から八九年までジャパン・パンチを書いた英人ワグマンや、明治十七八年から二十七年まで鳥羽繪二十六冊及び十五六種の單行の版畫帖を描いた佛人ビゴの繪は、共にかなりの名作であつて、今でも多く傳はつて残つて居る。しかし此の版畫は主として日本在留の外國人間にもてはやされたものであるから我國民の新版畫運動の中に入れる事は出来ぬ。又恐らくはこの人々の我國人に殘した一つの影響として二十年前後から時事新報に出たボンチ繪は、其藝術的意義の徹底しない點から見て、自分は之を新版畫運動の中に加へる事を少し躊躇するものである。

新聞の挿繪として我國の畫家の間に起つた洋畫趣味の挿繪は稍やく日清戰爭及び日露戰爭時代から始まつたもので、



人である。次の二圖は現存の獨逸の有名な版畫家ハイネの作品でこの圖にも我が國の古版畫の衣服の描法の影響が明かに認められる。



今までは主として挿繪に就いて述べた。次に着色木版として、最近に至つて柏亭君の「東京十二景」の一部、夢二君の「雁次郎」、「人形芝居」弧雁君の「二階」、「千住大橋」、「染模様今模様鏡」、弘光君の「新譯源氏物語」其他の作品が現はれた。

ない純粹なるカットとして新聞に掲げられるやうに成つたのは、やつと明治四十年頃からの事である。雜誌としては「めざまし草」 「ホト、ギス」などが恐らくは此の運動の先驅者であつたと記憶する。今では政治・文藝雜誌・婦人雜誌などの挿繪として著しい進歩を見るやうに成つたと共に



かゝる雜誌の挿繪を集めて單行本として弘光未醒・夢二・興平・國雄などの

諸君の畫集が刊行されるやうに成つた。茲に更に此期を利用して、日本の古版畫の影響を受けた西洋人の版畫を掲げて見る。この圖は本郷座の五月狂言に演じた貞奴のサロメの電車廣告に出たピアズレーのサロメの

版に就いても亦特筆すべき外國人の作品がある。明治の初年から日本の古版畫が佛國の印象派畫家の注意を惹いてから、我が錦繪は西洋の油繪や版畫に大なる影響を與へた事は、西洋の美術史家の齊く認容し且つ感謝して居る所である。殊に其印象的の感受性と美術工藝品的の表現性に大なる憧憬を有つて、遙るくと日本觀光の客となり、熱心に我が古版畫を蒐集した畫家も決して少なくない。就中一九〇〇年に我國に來た埃太利の畫家オルリックの彩色木版(他日この人の彩色木版を本誌に雕刻する機を得たいと思つて居る)は我國の將來の版畫家に何等かの暗示を與へる所があるに違ひない。其他米人としては二度我國に來たラム夫人、日本に滞在して居るハイド嬢などもあるけれども、この人々の作品には取り出で云ふだけの價値のあるものがない。以上述べたやうな挿繪及び版畫の運動を自分は第二傾向と稱する。

新版畫は更に雜誌の表紙繪として、書籍の表紙・見返し・扉・包み紙・箱等の装禎として、雜誌や新聞のカットとして、工藝品の圖案集として新らしい範圍を開拓するに至つ

た。斯の如き版畫の裝飾化運動は、明治四十年代あたりから大なる時代の要求を受けて、新しい圖案家に依つて多くの作品を出した。これは徳川期の版畫家が刷り物、千社札又は玩具繪の一部の外に餘り徹底した裝飾化運動を爲し得なかつたのに比して、大なる進歩を示すものと云はなければならぬ。之を第三傾向と稱へて置く。

此の傾向と前後して、洋畫の様式を或は木彫や着色石膏像の表現法に轉移し、或は裝飾品、工藝品（陶器、袋物、木細工、文房具、玩具、粧裝品入、服飾の一部等）の意匠に轉移しやうとする運動は、やはり明治四十年代あたりから洋畫展覽會の一隅、小工藝品展覽會、節句又はクリスマス等の賣店等に現はれて、新版畫運動と或る時代的默契なり連絡なりが極めて密接に保たれつゝある事を了解せしめた。勿論之を以て直ちに新版畫の一つの運動と見做す事は出来なけれども、作品や作家の方向と將來の相互關係などから推して、兎も角も之を新版畫の應用範圍と見て第四傾向と呼んで置く。

併し乍ら現在のやうな何等の底力のない此の種の新運動は

千社札と浮世繪

扇のひろ鷹

この納札（千社札）は道歩札と交換札の二つに分れて居て、道歩と云ふのは、神社佛閣を貼つて歩行く墨摺一遍に限るもの、交換札は一定の席上へ寄つて各自意匠を凝らした札を互に交換するもので、これには彩色五六遍より、多きは廿餘遍摺に至るものがある。

千社札に浮世繪を應用したのは、今云つた交換札に屬するもので、先づ交換札の起りを云ふと、寛政十一年己未四月五日京橋卅間堀三丁目長島（題名を銀市と云ふ）方で、始めて江戸中大寄合と云ふ名の下に開いたのであつた。

此大寄合を文化十一年四月五日とする人があつたが、これは何かの間違ひであらう、寛政十一年と云ふ確たる證は山中笑先生が珍藏せらるる、銀谷留自貼「寄合札貼込帳」の巻頭に寛

うか疑はしい。先づ第一に企業や經營の經濟と美育行政の上から見て、此の運動は新時代の美術工藝品たる質的徹底と量的包括とを有つて居ないやうである。第二に趣味と時代生活との關係から見て、此の運動は從來の裝飾品工藝品の傾向（桃山時代や元祿時代を歴史的に模範的のものとして……）と比べて何等の社會的安住性を具へて居ないのみならず、却つて過去の階級的趣味や傳習的嗜好の爲めに壓迫と嘲笑とを蒙つて居るやうである。第三に實用上の技巧及び意義の徹底の上から見て、此の運動は舊式の裝飾品工藝品や骨董品や土俗玩具などのやうな老實なる又は含蓄のある機能を發揮し得ないやうである。

扱て右の如くに新版畫の開拓の傾向を述べ終つたから、次に文明問題として新版畫の振興運動を説かなければならぬ。順序と成つた。然るに此の問題を取り扱ふには、東西版畫の歴史と最近の藝術運動の現状とを尋ねて、藝術及び經濟の相關問題に時代的解決を下さなければならぬ。故に此の問題に就ては更に他日稿を改めて讀者に見えて其是正を請ひたいと思ふ。

此大寄合が浮世繪と接近する萌芽となつて、今迄題名で意匠を凝して居たものが、繪を加えて題名に應用する傾向が現はれて來た。

浮世繪として納札に署名したのは、自分の見た所で古いと

其時出した、ちらしの寫しがあるのを見て、文化とするのは誤りである。

此交換會が浮世繪と接近する萌芽となつて、今迄題名で意匠を凝して居たものが、繪を加えて題名に應用する傾向が現はれて來た。

浮世繪として納札に署名したのは、自分の見た所で古いと

記書北澤筆千社札（天保時代）いせ萬氏藏



醉中連
血
定